

## 研究主題

発達障害のある子の理解と支援  
～言語環境を豊かにする取り組みを通して～

**要約：**発達障害の児童を理解し、その支援のあり方を探るために、個に応じた支援・指導と温かい集団作りの 2 つの視点をもち、取り組んだ。前者では、発達障害のある児童の言葉を苦手としている実態をつかみ、児童の興味・関心を授業に活用していくことで、学習意欲や読み取りの力、また集中力などを高めることができた。後者では、計画的にソーシャルスキルやエンカウンターなど実施することで、より好ましい人間関係を築くことができるなど、言語環境を配慮した取り組みは有効であった。

**キーワード：** 発達障害 言語環境 実態把握 個に応じた支援・指導 人間関係づくり リライト教材

## I. 主題副題設定の理由

4 年前勤務校に転任して、個性豊かな児童の多いことに驚かされた。こだわりが強く、対人関係が上手にとれない児童や学習面や生活面のつまずきのある児童が見られた。また小規模校のため、保育園から同一集団で過ごしており、深くつきあえる反面、上下関係が明確である。言葉の面で気になることが多く温かさにかける面が見られ、集団の中で友だちの言葉に傷ついている児童がおり、言語環境が整っているとはいえないと強く感じていた。

現在、障害のある児童生徒の教育をめぐる諸情勢が、変化してきている。平成 14 年に通常学級で行われた全国実態調査において、約 6% 程度の割合で特別な教育支援を要する児童生徒がいることがわかっている。

新学習指導要領の総則に「学校生活全体を通して、言語に対する関心や理解を深め、言語環境を整え、・・・」とあるように、児童生徒の言語活動を適正にする上で、学校生活全体における言語環境を望ましい状態に整えることが求められる。

このような現状から、発達障害について学び、多様化した特性に合った適切な支援や指導をしたいと考えた。また周囲にいる様々なタイプの気になる児童に対応し、学級集団の人的環境へ配慮し、特別支援の土台といえる集団作りに取り組んでいきたい。

## II. 研究の目的

発達障害の理解を深め、個に応じた支援・指導と温かい集団づくりに視点をもち、言語環境を豊かにする取り組みを通して、よりよい支援の在り方を探る。

## III. 方法

- (1) 発達障害の特性について理解を深め、特別支援教育の在り方について学ぶ
- (2) アセスメントの方法を学ぶ
- (3) 人間関係づくりの在り方を学ぶ
- (4) 文献や関係機関への聴き取りから発達障害の特性に合った指導・支援について学ぶ
- (5) 特性にあった言語指導や教材について学ぶ
- (6) 文献や学んだことから、実践に取り組む
- (7) 子どもの姿の変容や分析から考察する

## IV. 研究の内容

## 1. 発達障害の特性と特別支援教育

(1) 自閉症：3 歳位までに現れ、①他人との社会的関係の形成の困難さ、②言葉の発達の遅れ、③興味や関心が狭く特定のものにこだわることを特徴とする行動の障害である。

(2) 高機能自閉症：自閉症のうち、知的機能の発達の遅れを伴わないものをいう。アスペルガー症候群とは、知的発達の遅れを伴わず、かつ、自閉症の特徴のうち言葉の遅れを伴わないものである。なお、高機能自閉症やアスペルガー症候群は、広汎性発達障害に分類されるものである。

(3) 学習障害(LD)：基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す状態を指すものである。

(4) 注意欠陥/多動性障害(ADHD)：年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び、又は衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。

平成 19 年 4 月に施行された学校教育法の一部改正により、全ての学校において特別支援教育を推進することが以下のように、法律上も明確に規定された。

① 地域のニーズに応じて、設置者(都道府県など)の判断で、一つの障害種に対応した特別支援学校だけではなく、複数の障害種に対応した特別支援学校のいずれもが設置可能である。

② 重複障害のある児童・生徒に、より適切に対応する。

③ 幼稚園・小学校・中学校・高等学校・中等教育学校においても、通常の学級も含め、特別支援教育を行う。

## 2. アセスメント

アセスメントとは、児童や保護者との面接、行動観察、聴き取り、チェックリスト、心理検査などを実施し、情報をいろいろな角度から集め、整理していくプロセスをいう。

発達障害の心理アセスメントで用いられる主な検査としては、WISC-III 知能検査、K-ABC 心理・教育アセスメントバッテリー、ITPA 言語学習能力診断検査(1993 年改訂版)が挙げられる。そのほかの検査として、田中ビネーの知能検査 V、グッドイナフ人物画知能(DAM)、TK 式言語発達診断検査、絵画語彙発達検査(PVT-R)などがある。そのほか、集団の実態把握に Q-U がある。

発達障害のある児童は、発達に偏りが見られたり、得意な

ことと苦手なことの差が大きかったりする場合がある。指導や支援の中に興味や関心のあるものを活用し、高い能力を利用して苦手なところを補うように援助する。

### 3. 人間関係づくり

新学習指導要領総則 第1章第4の2(1)の教育課程実施上の配慮事項において、「児童の言語活動は、児童を取り巻く言語環境によって影響を受けることが大きいので、学校全体における言語環境を整備する」とある。

学校生活全体における言語環境の整備のなかに、教師と児童、児童相互の話し言葉が適切に、そして児童が集団の中で安心して話ができるような好ましい人間関係を築くことが含まれている。「児童相互の好ましい人間関係を築くこと」から、学級集団づくりにも目を向けて、特別支援教育を充実させることを考える。

一人一人の児童の援助とそのレベルを把握し、効率的に対応するためにQ-Uを用いる。Q-Uとは学級集団のルールとリレーシヨンの確立状況を知る方法で、河村茂雄が開発したものである。Q-Uは、「学級満足度尺度(いごちのよいクラスにするためのアンケート)」と「学校生活意欲尺度(やる気のあるクラスをつくるためのアンケート)」という、二つの尺度で構成されるQ-Uを用いて、一人一人の児童の援助とそのレベルを把握し、効率的に対応する。また教師の行っている対応の種類・特質を把握した上で、児童が必要としている援助を的確に行うことができる。次のような対応や援助の方法が考えられる。

#### (1) ソーシャルスキル

ソーシャルスキルとは、「社会生活や知人関係を営んでいくために、必要とされる技能」と定義される。以前は家庭生活や地域社会で身に付いていたあいさつの仕方や兄弟姉妹の関わりの中で培ってきた人への関わり方、地域の人への話し方の丁寧さなど対人関係を営む技術を教え、児童同士の間をスムーズにしていくことが大切である。

#### (2) 構成的グループエンカウンター

気心が通じる相手とふれあえる人間関係は、快適な生活を送る上で重要である。構成的グループエンカウンターは、それを人工的に体験することで、生きる力と意欲そして技術を身に付けることにつながる。構成的グループエンカウンターは、その活動のねらいをある程度定めた計画のもとに、リーダーや時間、人数を配慮した課題を提示しながら展開する教育的なグループ体験である。

#### (3) アサーション

アサーションとは、自分の考え、欲求、気持ちなどを率直に、正直に、その場の状況にあった適切な方法で述べることである。人間関係の持ち方には、第1に自分のことだけ考えて、他者を踏みにじるやり方、第2に自分のことよりも他者を常に優先し、自分のことを後回しにするやり方、第3は、自分のことをまず考えるが、他者をも配慮するやり方があり、アサーションとは、第3のやり方をいう。

### 4. 発達障害の特性にあった指導・支援

障害の種類と具体的な指導・支援を次に述べる。

#### (1) 学習障害(LD) :

【聞く・話すことへの支援】話を集中させるための工夫や文字や絵などの視覚的支援を活用する。ジェスチャーで発表するなど話さなくても表現できるよう発表の仕方を工夫したり、発言前に「〇〇について話してね。」と話題を再確認したりする。

【読む・書くことへの支援】音読が苦手で、一字一字たどりながら読む児童には、単語や文節ごとに線で区切ったりフラッシュカードを活用したりして、まとまりがわかる配慮をする。文章中の重要なポイントに線を引き、キーワードを書き出すなどして内容を整理し、それを実生活と照らし合わせながら推理したり解釈したりする練習をする。漢字が書けない児童には、混同しやすい漢字や似た漢字を簡単なフレーズにして唱えたり、説明を加えたりして、その違いをはっきり示す。

【計算・推論することへの支援】集まりを理解させたり、多感覚を利用して九九を暗記したりする。文章題から立式できない場合は、イメージがわくように、文章の内容をその子の日常生活に即したもので練習する。図形の問題は、スモールステップでの作図や目で見た図を頭の中で組み合わせる練習をする。

#### (2) 注意欠陥/多動性障害(ADHD) :

【周囲の刺激の調節】座席の配置では教師のそばにしたり、落ち着いた児童の間にしたりするなど刺激の多い席を避ける、黒板周辺の掲示物は必要最低限にする、机の上には、授業で使うもの以外は出しておかないようにさせる。

【集中時間への配慮】作業や課題は一度に達成することが可能な量にする、問題や宿題の量を児童に合わせて少なくする、活動にメリハリをつけ授業を構成する。

【指示の出し方の工夫】1回の指示は一つの内容にする、具体的に指示する。

【見通しが持てる工夫】一日の流れや課題の分量などを前もって示す。

(3) 高機能自閉症・アスペルガー症候群：注意欠陥/多動性障害(ADHD)で述べたことに加えて、対人面やコミュニケーション面、感覚の特異性への配慮や対応が重要になる。

【対人面やコミュニケーション面への支援】守るべきルールや約束事のいくつかを児童と相談して決める、混乱したときに落ち着ける空間を準備する、予定を変更する場合は事前に伝え、視覚的に確認できるように明示する、言葉の意味や状況に応じた使い方を教える。

【感覚の特異性への配慮】例えば音に敏感な児童にその嫌がる音を避けるというように、混乱を引き起こす原因やものを可能な限り取り除く。

### 5. 特性に合った言語指導や教材

言語の指導や配慮が必要な発達障害には、コミュニケーション障害(発達の言語の障害)、学習障害、広汎性発達障害、ADHD、知的障害などある。

#### (1) 言語指導

①聞いて理解することの指導：口頭指示の直後に復唱確認や「〇×クイズ」、なぞなぞ、ビンゴ、宝探しゲームなどする。

②話すことの指導：発音・構音・文法・会話・スピーチ。

③読むことの指導：ひらがな学習で「フラッシュカード」, 分ち書き, マーカーで色つけ, 漢字の読み分け。行間を空けることや2行スリット, 色を付けること。

④書くことの指導：撥音や漢字の指導に視覚的支援をする。

⑤読み書きに共通の配慮：手作りのテストや板書を穴埋め式にしたプリント。

## (2)通級指導教室における指導・支援

(県内通級指導担当者へのアンケートから)

①学習における効果のある支援：絵や具体物, 絵カードなど指差しできるものを用いるなど視覚的な支援, 声の大きさ, 抑揚の配慮, 会話のできる場面の設定など聴覚的な支援を行う。

②認知処理様式を生かす指導：見本を見せて部分, 作り方を説明するなど全体を伝えた上で具体的なことを説明する。4コマ漫画を利用するなど順序性を踏まえて教える。

③注意・集中力を高める手だて：児童の興味のあることを学習に取り入れることや活動内容, 終了の見通しを持たせる。

③その他：お話のあらすじを読み取らせるために, 動作化や台詞化をする。モデルを提示したワークシートを活用する。スモールステップでほめるやごほうびを用いた取り組みをする。課題の量や子どもとのやりとりが楽しく進むように配慮する。体を通した様々な体験や詩の音読, 絵本の読み聞かせなどとする。

## (3)リライト教材

リライト教材とは, 光元聰江氏が考案したもので, 教科書の本文を子どもに分かりやすい表現に書き換えた教材をいう。『表現はやさしく, 内容は相当学年レベルで』を考慮して書き換える。現在, 七種類の作成法があり, 「レベル0」「レベル1」「レベル2」「レベル3/4」とレベル分けもしている。音読譜(考案者は岡本淑明氏)は, 日本語の文章を音読しやすくするため, 音調を視覚的に書き表したものをいう。

## 6. 対象児童と交流学級の実態把握

### (1)対象児童：特別支援学級在籍 中学年

困っているところ：パニックがある, 集団に参加できない, 発音が不明瞭, 音読はできるが内容を十分に読み取れない。得意なところ：漢字学習, 計算, クイズ, パズル, ゲームが好き。心理検査(WISC-III)で言語性IQと動作性IQに大きな差。実践：国語の学習をリライト教材文で行う, 挿絵など視覚支援を用いる, 好きな音読を取り入れる。

(2)交流学級：言葉づかいが粗野であるが, パワーのある学年。チェック表で個々の児童をつかむ。担任から聞き取り。児童の意識調査やQ-Uを実施して学級の状態を把握する。

## 7. 授業実践

### (1)対象児童：

#### 実践1

漢字学習と国語「白いぼうし」の学習をリライト教材文で行う(6月に3回)。挿絵など視覚支援を用い, 好きな音読を取り入れる。

#### 《授業の効果》

①挿絵に興味をもち, 音読は主体的にできた。

#### 《課題・改善点》

①読み取りは集中できず離席が多かった。

②読み取りの実践が, 児童の状態に合うものでなかったの  
で, 実態をより把握することで支援・指導方法を探りたい。

③交流につなぐ手だてをもちたい。

#### 実践2

リライト教材に沿って対象児童が持てるよう課題を作成する。国語「ごんぎつね」の学習をリライト教材で行う(10月に6回)。リライト教材は音読譜にし, レベルは2で行う。また「課題」ワークシートを作成し, 読み取りで用いる。またクイズを活動に取り入れる。見通しをもてるように学習の流れを理解させる手だてをもつ。

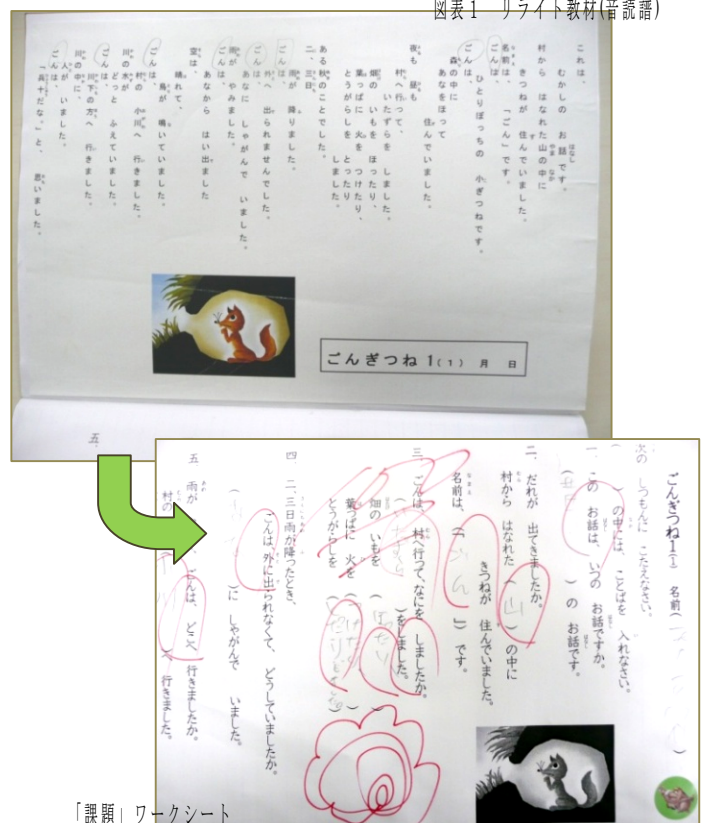
担任によるとポイントを集めるとご褒美がもらえるという『ポイント』制を導入することで, 学習や交流参加に少しずつ意欲的になってきている。

そこで次の a 対象児童の好きなクイズを授業に取り入れる, b 飽きさせないように視覚支援や活動を組み込んで, テンポよく授業を進める, c 対象児童の好きな物語教材「ごんぎつね」を実践する, の3つの点を留意して, 苦手意識をもつ国語の読み取りの実践を行う。

#### 《授業の効果》

①「リライト教材」と「課題」ワークシート(図表1)をノートの見開きの形で児童に提示し学習を進めた。見開きにしたことで, 「リライト教材」を見ながら, 自ら内容読み取りの学習を進めることができた。

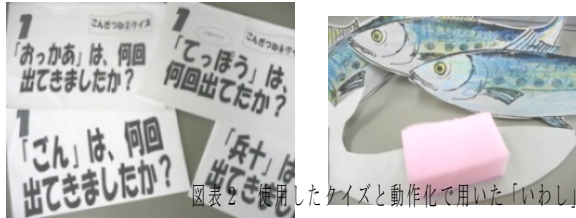
図表1 リライト教材(音読譜)



②自分で考えて答えが書けて, それに全部に赤丸がついたことで「わかった」「できた」という満足感をもつことができ, 読みへの自信につながった。「課題」ワークシートの答えを考えるために, 何度も音読することができた。

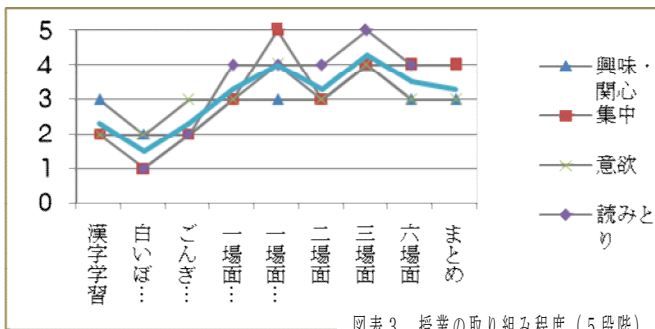
③お話に児童の興味をもたせることができたのは、「リライト教材」の音読譜を用いたことが大きい。それにより、児童の「読み」への抵抗感を減らすことができた。作成した「課題」ワークシートが児童の実態に即したもので学習意欲につながった。

④紙芝居や挿絵カードの活用やクイズ(図表 2)や動作化などを活用することが集中を高めることができた。



図表 2 使用したクイズと動作化で用いた「いわし」

⑤ビデオから児童の興味・関心はどうか、集中しているか、意欲的に活動しているか、内容を読み取っているかの4つの観点で分析した。座っているときの児童の動きやつぶやきの声などに注目して見直し、5段階で評価した。それをまとめた図を次に表示する(図表 3)。読みの学習に苦手意識が強かった児童が集中力も学習意欲も高まってきたことが明らかである。



図表 3 授業の取り組み程度 (5段階)

## (2)学級集団

### 実践 1

事前に学級集団の実態把握に Q-U を実施する。特別活動の時間に「あったかチクチク言葉」と「ビンゴ」のソーシャルスキル指導を行う(6月に2回)。

《授業の効果》

①言葉の大切さや自分の言い方を考えることができるようなソーシャルスキル指導を行い、よりよい仲間づくりにつなげる。言葉には、相手を温かくしたり反対に傷つけたりするものがあるという意識がもてた。

②「今の〇〇さんの言ったのは、あったか言葉だ。」や「体育のゲームで、チクチク言葉が出なくて、よかった。」など日常の中でも意識して用いることができた。また「あったか・チクチク言葉」の掲示物なども功を奏した。

《課題・改善点》

①「言葉がきつい」や「トラブルが多い」という学級集団の実態に考慮し、特別活動の授業を計画する。内容については、社会生活や対人関係を営んでいくために必要とされる技能のうち、言葉や相手を意識させるものを計画する。

②ソーシャルスキルやエンカウンターなど楽しい活動を通して仲間づくりにつなげる。

③態度や行動の気になる児童の追跡調査を行う。

### 実践 2

特別活動の時間に「相手の動きに合わせる」「話をきく」「わかりやすく伝える」の実践を行う(10月に3回)。またその後 Q-U を実施する。

《授業の効果》

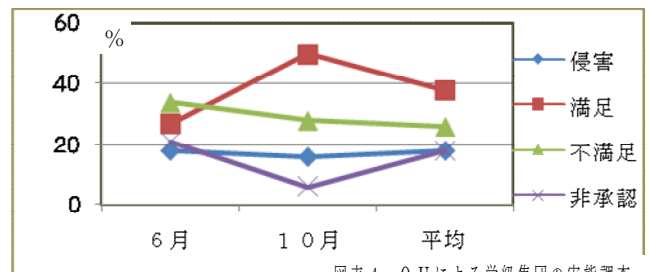
①相手を意識させる学習については、a 相手の動きに合わせて、b 相手の話を聴く、c 相手に伝わるように話す、と段階を追って実践を行った。ゲームを通して楽しく活動できた。

《課題・改善点》

①児童の中にはゲームの勝敗にこだわるやペアの相手の友だちに嫌なことを言うなどが見られた。

(3)振り返り

実践後の Q-U(図表 4)では、前回に比べ「学級生活満足群」の児童がかなり増え、全国平均よりも上回っている。非承認群の児童がかなり減った。特別支援学級在籍児童は不適応感をもっているか、またはいじめ・冷やかしなどを受けていると感じているか否かを表す『被侵害得点』がかなり減り、良い傾向が見られる。



図表 4 Q-Uによる学級集団の実態調査

特別支援学級在籍児童は朝の会から 1.2 限の授業はそのまま交流できるようになってきた。それ以外に、体育や図画工作、総合の時間などは自ら決めて交流に参加している。

このように特別支援学級在籍児童が、学級集団に入って交流できるようになったことから、交流学級が「居心地のよい学級」であり「好ましい人間関係」が築かれてきている。これは支援体制や担任の意識した関わりが効果的に働いたと考えられる。

## V 結論

(1)言葉を苦手としている発達障害のある児童の実態を把握し、言語環境を配慮した取り組みは、学習意欲や読み取りの力、集中力を高めるのに有効である。

(2)児童の興味・関心を授業に活用して、わかりやすく支援することで、児童は苦手意識のある学習でも意欲的に取り組むことができる。

(3)Q-Uなどで集団の現状をつかみ、必要な支援や対応を行うことで人間関係に変化が表れ、発達障害のある児童が集団に積極的に参加できるようになる。

## VI 今後の課題

(1)児童の実態を十分に把握し、発達障害の特性に合った教材・教具や指導の在り方をさらに考えていきたい。

(2)発達障害の特性に合った支援の在り方や作成した SST の年間指導計画などを学校現場の職員に提案し、共有できるような環境を整え、児童や集団の実態に合わせて活用したい。